東方project　狂宴

財源

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方ｐｒｏｊｅｃｔ　狂宴

【Ｎコード】
Ｎ６３２３Ｕ

【作者名】
財源

【あらすじ】
よくあるオリ主来訪の話です。
主人公は二人の男です。ゴミと人の害です。

狂言回しはくるくると（前書き）

腹の立つ狂言回しですが、この世界観を堪能してくれると救われます。

狂言回しはくるくると

暗闇にひとり男がいた。

その男はニタついた笑みでこちらをじっと見つめていた。
端正な顔だが何処かその笑みが醜くてそう云う素材を台無しにしていた。

男が見せびらかす様に我々に数枚のＣＤ－ＲＯＭのケースを我々の目の前に指の間に挟み込み
餌でも見せびらかす様にかざしていた。

男の身体は黒い服でも来ているからか闇に溶け込んでいた。表情とそのケースだけが浮かび上がっている。
暗闇の中で目を凝らせば、そのケースにはいずれも『東方』という文字が書かれていた。

「みなさんどうもこんばんわ、私は卑しき唯の狂言回しにございます。いわゆるストーリーテラーとでも言っておくべきでしょうかぁ？」

芝居がかる様な花に付くような音色でニヤつきながら、おとこは何が楽しいのかゆらゆらとオーバーな動作でそう云った。

「実はぁ？私ぃ？三次元の人をぉ二次元の世界に飛ばせる能力があったりするんですよぉ♪いやぁ、ま、実際飛ばせるんですけっどぉ～♪」

何かに酔いしれる様な目の前にいる誰かを馬鹿にするようなそんな音色で、男は誰かに向かって続ける。

「私の管轄はぁこの作品でしてねぇ？何でも人気の東方シリーズとかいう奴ですよぉ…このゲーム自体はよく分かりませんけどねぇ…ネット上じゃ？幻想入り？とかで一般人がその世界に入って色々とやるっていう話が在りますよねぇ…？アレを現実にこの世界の誰かにやってもらおうという事ですよ」

男は感極まったテンションで何が可笑しいのか、愉快に笑いながらくるくると踊った。その様子はイカれた酔っ払いの様な不快さがある。

「実はぁ？わったっしぃ…既に何人か興味範囲で送ったんですよぉ？いろんなモルモットをねぇ？」

ぎろりと視線を向けてまるで獲物を見つけたかのような…そんな動作で話を続ける。

「ひとつは東方…この作品を知らない人間をてけとーに迷いの森だのに送ったんですがぁ…数時間で瘴気にやられてポックリと…その次の人物は特殊なチートな能力を与えたんですけどぉ…

この話に居るスキマ？や主人公の勘でボコボコにされて幽閉されてめでたしめでたし…どうもすぐおっ死ぬか封印されるんでじゃあ、東方知ってる奴送って見たんですが…」

ここで大げさにため息を吐き、つまらなさそうに肩をすくめた。

「何故か、大半が紅魔館？ってとこでしたっけ？そこの吸血鬼の妹に殺されて終わる結末が多い多い…その次には向日葵のステージでしたっけ？
まぁ、なまじ動画や作品を見てると自分が特別な気になって
そのあげく…という所でしょうねぇ…知ってる奴は知らない奴より何ていうか、滑稽な死に様をしたので面白かったですよ。俺が変えてやるんだ？的な？」

こぼれおちそうな笑いを抑えながら、涙を浮かべて男はプルプルと不快感を湧かせる笑みを向けた。

「ま、例外もありますが…それでも職に炙れて野垂れ死にか…博麗神社に付く前に妖怪につかまり…ＴＨＥ・ＥＮＤです。
後…そいつが来た事によってイレギュラーな異変が出て来て、そこで命を落とすってのが定番でしたねぇ…ま、本来居ないやつが異変に関わるんだから本来ない異変が出てくるのは当然です」

馬鹿にしたように男は語り、懐かしむように遠くを見つめた。

「あー…太古の日本に能力持って転生したけど、幻想卿は存在しない路を通ってしまって孤独に発狂した奴もいましたねぇ…かぐや姫も藤原と仲良く暮らしたのでそっちの意味では良かったでしょうけど」

そこまではなすと一息入れて、暗闇の空を見上げた。

「とまぁ…一つ分かった事は…全うな感性、全うな生き方…普通の感性を持ったもの、人並みに生きてきたもの…家庭が在るもの、社会に守られてるもの…そう云った方々は
あそこでは生きられないという事という風に結論しました。ぶっちゃけ、あそこ普通の感性の人間が行く場所じゃありません」

そして男はさらにこう続ける。

「ならば…そうではない人間達が行かしたらどうなるか…。救いようのない犯罪者や外道な人間もいかせてみましたが、基本は似たようなものでした。もっと壊れた人間を…
それこそ小説や漫画でしかない様な複雑な人間を、そして私は暇つぶしの為に探して…ようやく見つけたのです…それも二人も…」

「ちなみにその二人は男です。そしてこの男二人は当人たちにしか分からない価値観で動いています…。そして、恐らく最もこの世界で生き抜ける二人…」

――――その愚かな二人のこれからを見てみたいと思いませんか？

狂言回しはくるくると（後書き）

今回はまだ原作キャラはいませんが、次回出てくるでしょう多分。
狂言回しに目をつけられた運の悪い二人はどんな奴なのか？

ゴミ箱にようこそ（前書き）

何というか、ケンカ売ってるタイトルですね；
ゆうかりんのキャラってこれであってるかどうか…。

ゴミ箱にようこそ

ひとりの男、いや少年が捨てられたゴミのように意識を失って倒れていた。

「う…」

やがて少年は目を覚まし辺りを振り返る。上半身をむくりと起こして動きの悪い人形のように辺りを見回すと薄暗かった。
尻や背中に異物が当たっていた。よっこらせとでも言うように立ちあがると、どうやら自分は囲まれているようだった。

「俺は……」

ぼやくように呟くと少年は心臓に手を当てる。

とくんとくん…

当たり前の鼓動がそこに会った。次に全身を両手くまなく見回してみる。
シンプルな服装だ。両腕には傷一つ付いていない。何故だ？

自分はかなり重症を負った…いや、負わされていたはずだ…。という事は自分はやはり死んだのか？

「いや、そんなはずねーカ…俺が生きてんならぁ…アイツも生きてンだろーよ？」

少年の容貌はかなり整っていた。茶髪をややぼさぼさに膨らませた犬の羽毛を思わす様な髪型。鋭い顔つきと瞳。

カッターシャツにスラックスというシンプルなものだ。
明らかに美少年とは言わぬまでも、女性受けなスタイルをしていた。

「よっと…」

とりあえず伸ばしていただらしない足に力を入れて踏ん張って立ち上がるが、自分はどうやら取り囲まれているようだ。
無数の向日葵の茎に囲まれていた。少年はため息を吐いた。

「…踏み折って進むしかねぇーカ？ココが何処かわかんねーし…」

少年にとって花は好きではないが――――かと言って踏み荒らすほど嫌いでもないが――――こう囲まれた場所にいると全てよけて通るのは不可能だ。

ぺき…ぺき…

とりあえず埒が明かないと判断した彼はこの向日葵の海から出るように、その群れをかき分けへし折り、ざくざくと進んでいく。どれくらいそうしただろう？それとも、どれくらいも経っていないのだろうか？

やがて土の道が出てきた。

「…ってと…」

まるで田舎の様な畔道が出て来てなんとか安堵したように少年は、肩で息を切らした。

（しかし…ここはどこなんだ？…いや、まぁ別に何処でもいいんだけど…）

少年はここに来る前に数々の事をやらかして来たのである意味では、こんな意味不明の場所にいるのは自分の人生の中で感じた幸運だったかもしれない。

「しかし、汚れたもんだ…」

踏み荒らして向日葵をたおりながら来たせいか、肩に向日葵の花

びら、スラックスに覆われた足には泥や砂が僅かに付着していた。

（まず、道を効かないと始まらねーよなァ…）

とりあえず辺りを見回す。すると不意に視線を感じた。自分を強く見つめる視線だ。

その視線は普通の人間なら恐怖を覚えるたぐいのものだったが、その少年は何の感慨もなくそこに振り返った。
すると、自分の４メーター位先に日傘をさした癖のある緑のショートボブに、真紅の瞳をした女がいた。

（緑の髪に赤い目？……）

物珍しい外見を見つめて内心関心めいた目を向けていた。漫画やアニメでしかそう云ったものを見た事がなかったのが要因だ。
しかもそれが不自然ではないくらい似合っている…くらい目の前の女には似合っていた。
服装はチェック柄のベストの下に白のカッターシャツ、同じくチェック柄のロングスカートを穿いていた。似合ってるなと漠然と少年は何となくそう思った。

だが、それよりも一番興味を惹いたのはその笑顔だった。優しく天使の様な笑みだが……

（…殺気がパねぇナ…）

正味な話、少年はあの女性の事は当然分からないしココが何処かも大して興味はない。
もともともう帰るつもりはないのだから。それは殺気を向ける女性

に対しても同様だ。だが、そう云うわけにもいかなそうだ。

少年は瞳を閉じてとりあえず一礼した。

「……なんのつもり、かしら？」

女の声は下げた頭のすぐ上でした。まるで最初から自分の近くにいたように…。

「イヤ、アンタが何に怒ってるのか分かんねーケド、とりあえず見逃してくんねーかナ？」

頭を下げたまま少年はそう云った。その言葉に女は笑みを収めて細い目を見開いた。

「分かっていないのに謝ったのいい度胸ね……」

男の髪をむんずっと掴んで端正な顔を女は自らの方に向かせた。

どこか加虐的な笑みを浮かべながら…少年はそうされてもどうする風でもなく美女を見つめるだけだ。

「ここはねぇ…私が育てた向日葵が活きて居る場所なの…貴方はそれを踏み砕いて殺した…そう云うこと分かる？」

「……」

少女はこれまで以上に殺気を放ち、少年を射殺す様に睨んだが少年はその殺気に我関せずだった。

「ふぅん…その服装、貴方外来人…なのかしら？近ごろ多いのよね

ぇ…馴れ馴れしい外来人…下心見え見えの…貴方もその口かしら？」
「……？」

美女は凄むように云いつつも少年は小首を傾げるだけ。そもそも少年には美女の事情など興味もなければ知った事ではない。

「…アナタ…ムカつくわね…一つくらい何かリアクションしたらどうかしら？」

掴んでいた少年の頭を無造作に放り投げ、大木に叩きつけた。背中の衝撃で呼吸が全部肺から流れ出て咽る。
しかし、少年は緩慢とした動作で立ち上がり美女を見やった。

「気は済んだ？俺はもういくヨ？」

まるで興味がないかのように、そういうと痛む背中をさすりながら後にしようとした。

「待ちなさい…」
「？」

女性は明らかに笑顔をすて冷徹で無機質な表情で少年を捉えていた。しかし、少年のリアクションは薄情なくらい薄い。

(見たところ、外来人…能力なしの普通の人間……でも、この子…人間でありながら…人間とは遠い物を感じるわね…妖怪に近いというわけでもないようだけど)

「私の名前は風見優香…妖怪よ…貴方の名前、教えてもらえるかしら？」

「…箱崎（はこざき）　芥（あくた）ってモンだよ」

その名前に優香は僅かに目を見開き怪訝に見つめた。

芥…意味はゴミを意味する名前だ。すくなくとも名前にするべき文字ではない。苗字の箱崎の箱と相まってゴミ箱を連想してしまう。

「……貴方の両親はよほどイカれてるようね？…もう、素敵なくらい」

再び笑みを向けてにっこりとほほ笑むが、その笑みには嘲笑めいたものが混じっていた。

「んー…知ってんヨ？」

こちらは普通に可笑しそうに笑みを浮かべた。

幽香はそれを見て毒気を抜かれるのを感じた。なんというか彼はサディストの気を削ぐ程度の能力が在るんではないのか？と思うほどだ。

だが、同時に興味も覚えた。

ゴミと名付けられて幻想郷に来た少年…。幽香は何となく思った。

あぁ。彼はゴミとして捨てられてここに来たんだな…と。

「幻想郷はゴミもゴミ箱も受け入れるわ…ようこそ…全て受け入れるゴミ箱の町へ…」

「へぇ…おあつらえ向きですね…芥（俺）にとっては…」

そしてこのゴミの意味を持つこの少年は、全て受け入れる優しく残酷なゴミ箱へと足を踏み入れた。

ゴミ箱にようこそ（後書き）

ゴミと花の邂逅です。
この少年がこんなに達観してるのは訳があります。
少なくとも名前を見れば…ですが…次回はもう一人の男の話になります。

価値観　芥（前書き）

主人公を構成する価値観です。
後々の話の展開になるので、みてやってください。

本来はもう一人の主人公の話に行くつもりでしたが、芥の心情を伝えるために
こういう形にしました。

価値観　芥

小学校の頃、まだ今以上にガキだったころ…俺はウサギや鶏を飼育していた。

自分の名前の意味はこのころから知っていたのだろう…そんな自分が滑稽だった。

俺が世界のゴミを代表する存在なら……他に生きる人間達にとってゴミなのなら俺(ゴミ)が育てるこの命は何なのだろう？

区切られた腐った木の牢屋二つをぼんやり見つめて、俺は何かに笑った。ウサギか鶏か…或いは自分か。

この小さい箱の国の中…ゴミ箱の中で俺は生きているんだ。

数カ月後、空き巣が入った。

鶏もウサギも俺と同じ…本当にゴミになっていた。

校長室に空き巣が入ったらしい。どういう経緯があったのか知らないが、鶏もウサギも全部ゴミになっていた。

そういうものをみて、俺は可笑しくて笑みを浮かべた。

――――お前達が死んで俺が生まれた…。

なら、俺も捨てようカ？……俺の未来も感情も何もかもを…。

そして今、その結果…優しいゴミ箱の中で産声を上げた。

そして、唯、向日葵に連れられ『アイツ』を待つだけだった。

価値観　芥（後書き）

芥は己の存在に執着をしていません。
名前の通りの存在だと思っています。

人間味が欠けた外来人を書いてみたかったんです。

こんな主人公たちですが、感想よろしくお願いします。

その男たちは何を成す？（前書き）

もう一人の主人公の視点です。
彼はどこのだれと邂逅するのでしょうか？

その男たちは何を成す？

フランドール・スカーレットはメイド長・十六夜咲夜とともに人里に向かって歩いていた。
何の事はない紅魔館にすむ長・レミリア・スカーレットの為に振舞う夕飯の買い出しだ。
唯、そこに妹のフランドール…フランがそこにいる事は彼女を知る誰もが意外に感じるだろう。

何故なら、紅魔館の長とその妹は吸血鬼で特にフランはその情緒不安定な精神により『あらゆるものを破壊する悪鬼』とささやかれており妖精メイドや
今となりで歩いている咲夜…そして姉のレミリアでさえ、つい最近まではその認識であり、こうしてメイド共に外に出て買い物をするという行為でさえありえないことだった。

しかし、紅魔館のレミリアが起こした異変によりそれを解決するべく動いた二人の少女たちが彼女の環境を変えた。

博麗神社にその人あり、幻想郷の防人…博麗霊夢、その相方の普通の魔法使い霧雨魔理沙との邂逅をきっかけに彼女は変わっていくことになる。
外に興味がなく、自分が触れればすぐに壊れてしまうモノに虚無感を覚えた少女は力の制御を覚え今に至る。
その為、今…彼女はメイド長である咲夜とともに街に出る事を最初の試練としていた。

まだ日中なので日傘を手放せないが、心は晴れよりも晴れやかだった。

「ねぇ、咲夜♪今日は何を作ってくれるの？」
「それは妹様やお嬢様の喜ぶものを」

形式ではない優しい…それで垢抜けた瀟洒な微笑を向けて咲夜はフランドールにそう云い彼女の手を惹きながら歩いていた。

がさ…

すると不意に道の横に隣接していた森の方から音が聞こえて来て、蝶や鳥などが勢いよく飛び出し二人の前を横切って行った。

「わ…、な、なんだろ？」
「はぁ…」
特にそれだけなら気にすることもなかったのだが、フランの直感や本能めいたものが何かを捉えた。

五感が研ぎ澄まされ、闇の中で確かに気配を感じる。

人だ…。

「咲夜…人が倒れてるよっ。言ってみよう？」
「いっ、妹様！？」
咲夜から手を離してフランはその森の茂みに駆け出していく。
その方法に確かな命の息吹を感じた。そんなフランを慌てたように咲夜は追いかける。
（いる…ココに人が…）
数分後、フランは辺りを辺りを枝で汚しながら茂みをかき分けると……そこには長身の少年がいた。
そしてフランは僅かに驚いたように目を見開いた。
その少年の髪が燃えるように赤かった。
顔だけではない肌の色は白くまるで博麗の巫女の様なコントラストを醸していて顔も整っていた。
特徴的な髪は炎のように逆立っており、それが赤さに拍車をかけた。
惜しむらくはその少年は眠る様に…実際は眠っているのか木を背もたれにして微動だにしない。
するのは呼吸似合わせて動く腹だけだ。
何となくフランはその少年を見てこう思った。この人、どんな人なんだろう？
今まで自分に会いに来た外来人と呼ばれる人種は多かったが、気に入らなくて消して来た。同情的な目、分かった様な言葉…うんざ

りだった。
お前は悪くない、そう云った連中に自分が牙をむけば恨みと恐怖の目を向けて自分達を睨むのだから…。
この人もそんな人なのかな？という興味があった。

だが今までと違うのは、興味を持ったのは今回はフランだ。

「い、妹様……その方は」

後から来た咲夜は当然のようにフランに尋ね返す。こちらはフランが作った道を通ったのでそれほど汚れていない。

「ねぇ？咲夜ー？この人、飼ってもいい？」

フランはどこか新しいおもちゃを見つけた子供のように――――実際外見は子供だが――――笑みを浮かべた。

「あかっ……」

少年が目覚めたときの第一声がそれ、だった。事実、起き上がって見ても右を見ても左を見ても下を見ても赤だった。
ベッドに寝かされているようだ。とりあえず上体を起き上がる。

「……地獄ってズイブンとま、殺風景なトコなんだね…。血の池地

獄？…かな？」

細目を開けてどうする風でもなくため息を吐いて、少年は起き上がる。

身長なら恐らく１８０くらいはあるのだろう。細身の長身の男前が良い形容句だろう。

「確か、俺は『アイツ』と……まぁ、あんだけやって生きてるとは思ってなかったけど、ね」

「ひとりごとをする位の元気はあるようね？」

「おかげさまで」

少年が辺りを見回すと、いつの間にかメイド服を着た銀髪のスレンダーな美少女が腕を組み品定めをするような眼で彼を見つめていた。

いきなり降ってわいた美少女の存在に男前は躊躇も迷いもなく、普通に返答した。

少女はその男前の少年に肩透かしを食らったような気分になる。

「驚かないの？何か突っ込む事が在るでしょ？」

「あー…この屋敷、赤いんですけど、目に痛いから緑にした方が目にイイよ？」

「残念ね、リフォームは幻想郷の文化にあまり浸透してないのよ？それにこれはこれで匠の手が行き届いているでしょう？」

「や、まぁ、人様の住居の事情に余りヤイヤイ言うつもりはないさ…流してくれ」

自分の瞬間移動の事ではなく、紅魔館のカラーリングに突っ込む少年。

咲夜は何か疲れるようにため息を吐き肩をすくめそう返した。
「一応、有難うといった方がいいんですかね？俺には全く状況がのみこめないんですけど」
やや困った様な笑みをむけて少年はメイドの少女…咲夜に尋ねる。正直、彼が外来人なら有無を言わさず帰ってもらいたいのが本音だ。
何故か、外の世界から来た外来人は訳知り顔でココに来てフランを刺激して、死んでいくので色々迷惑だったのだ。
だから、特殊能力を使い色々手を打ったが…まれにそれを無効化してここに来るものもいた。だが、そう云った危険因子になるものは紫に消去させられるわけだが。
「あー…悪いんだけど、頼みが在るんだけどいい？」
「…？何かしら？」
「俺は何も聞かない、ココが何処かなんてそれほど興味もないし、ココがどんなにヤバい場所でも危険な地帯でもいい。俺をココに住まわせてくれないかな？」
その言葉に咲夜はやっぱりか、と呆れと嫌悪を浮かべた表情で彼を冷たく睨む。
「近頃、そう云う外来人が多いのよ。どういうワケか、この館に来て何を勘違いしたのか、命を散らす人間は少なからずいたわ…貴方もそう云う一人なのかしら？」
咲夜の言葉の意味はあまり分からないが、何処か苦笑を浮かべて少年は咲夜を見やった。
その瞬間咲夜は絶句した。

その少年の目の色は青かった…それ自体は珍しい事ではない。だが、その目は温度がなくて死んだような人間の瞳だった。
虚ろで空虚で……まるで達観して死期を黙って見守る年寄りの様な…。

「あんたが何を言ってるのか分からないけど…俺は、まだ死ぬわけにはいかない…いや、もう死んでるけど…『アイツ』がココに来てるかもしれないから…」
「あっ、あなた…何を言って？」

ベッドから立ち上がり少年はそのままの目線で咲夜を見つめた。
咲夜はこの少年の空恐ろしい気配に気圧され、止まってしまう。

この少年がどういう存在かは分からない、だが、外から来た人間なら能力はないはずだ。
そして服の上から見た感じでは、どちらかといえばこの少年の風貌は軟弱そうですらある。
パチュリーの見立てでは一般的な人間だとの判断だ。

「さっきの瞬間移動…アンタが唯モノじゃない事は分かってる。ケドさ？それが何？アンタが俺に敵対し、俺の前に立つんなら、アンタを倒して人質にするだけだ」

余りにもあっさりと彼はそう云った。その言葉は咲夜を激昂させるには十分な響きがあった。

こいつは何を言った？私を倒して、お嬢様に対するけん制をする

？唯の能力ももたない唯の人間が？

「ふざけるなっ！！貴様ごときっ…！！」

咲夜は空間から生えてきた煌びやかなナイフを指に挟み込み、怜悧な眼差しで少年を睨んだ。

「……」

しかしそんな朔夜の様子を冷静にというより無関心で普通に立ち上がる。それが尚更、彼女の感情をかきむしらせた。

そして咲夜は時を止めて、ナイフを彼の急所に向かい投げ捨てようとしたが…

「待ちなさい、咲夜」

「っ！！」

その声は怜悧で瀟洒な彼女にとっては絶対的な音。

自らの神経回路よりも複雑で尊い『神』を『経』たそれ…。咲夜は重く響く幼い音色の方に振り向くと…そこには少女になる手前の幼女がいた。

だが、その幼女からあふれ出る雰囲気は普通のそれとは違う。

まず風貌だ。

青みがかった銀髪、もしくは水色の混じった青髪に真紅の瞳。

そして人間ではありえない様な大きな、それこそ漫画でしか見た事がないよな悪魔の翼。

服装もあまり見るものではなく、淡いピンクのナイトキャップをかぶっており、衣服もそれにならってか淡いその色で統一されている。

その服に太い赤い線が入り、レースがついた襟。三角形に並んだ三つの赤い点がある。

両袖は短くふっくらと膨らんでおり、袖口には赤いリボンを蝶々で結んである。左腕には赤線が通ったレースを巻いている。

余りにも浮世離れしており、また人間離れした格好だった。

その目は目の前の赤い髪の少年を面白げに見ている。

「私はこの城の主…レミリア・スカーレット……ようこそ…人間…」

咲夜ですら重く感じる威圧的な笑みを、少年はどうする風でもなく唯見つめた。

この少年にとっては目の前の子供が人間であろうとそうでなかろうと余り意味を成さない。

大切な事は…一つで一人だけなのだから…。

「あら、動じないのね…フフフ…貴方は外の人間にしては面白い性格をしてるわね…貴方のお名前は何て言うのかしら…」

その言葉を受け取り、少年は初対面の人物にする様に当たり前に気楽にこう返した。

「俺の名前は、国栄害(こくえいがい)国の栄えを害する…とかいて国栄害…だ」

「何と云うか…両親がつけた名前にしては…壊れてるわね」

レミリアは何処か余りに残酷な言葉の名前に僅かに目を見開き驚

いた。これに至っては咲夜もそうなのか、静かに彼を見つめる。

「外来人…いえ、貴方の字を当てて害来人…というほうがしっくりくるのかしら…」

「さぁ…？少なくとも、名前通りの生き方はしてきたつもりだよ…恥はしないけどね」

気のない様な返答を害は返すと、レミリアは愉快そうに笑った。

その男たちは何を成す？（後書き）

はい、紅魔館って結構定番になってますよね；
何でか、唯、一応理由はあります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6323u/

東方project　狂宴

2011年10月9日09時44分発行